

26 カラヴァッジョ 《聖マタイの召命》

1600年ローマ大騒動の真の理由

2019

真鍋友範

西暦1600年、カラヴァッジョの《聖マタイの召命》が、サン・ルイージ・デイ・フランチェーゼ聖堂で公開されたとき、【ローマ中の人々が押し掛けて大騒動になった】と伝えられている。

では、【大騒ぎになった理由】は何故だったのか。

カラヴァッジョだけが、イエスの弟子マタイが呼ばれた場面の宗教絵画を、誰もが納得する感動的な場面として表現する能力を持っていたからなのか。

カラヴァッジョが、この絵画を複雑な《明暗法》で描いたからなのか。

いいや、もっと深い理由が隠されていたと考えられるのだ。



カラヴァッジョ 《聖マタイの召命》 1600
サン・ルイージ・デイ・フランチェーゼ聖堂／ローマ

この絵画の一般的な解説文で繰り返し説明されている《明暗法》の絵画表現は、ルネサンス期においてレオナルド・ダ・ヴィンチやジョルジョーネが開拓していた表現の再現であり、基本的には当時それほど目新しい表現ではなかったのだが、一方向からではなく複数の光源を利用するなどの工夫によって、複雑に光と闇を表現した部分については、確かに目新しかったと言える。

しかし、それだけでは多くの秀作絵画を普段から見てきたローマ民衆は驚かなかった筈だ。

《聖マタイの召命》を見たローマ民衆は、まずモデルを使ったからこそ表現出来た、登場人物が目の前にいるかのような【リアリズム表現】に驚き、更には誰も直ぐには解き明かせない、【誰がマタイかという謎解きゲーム】に心揺さぶられ、最後には、ヴェネチアには前例があったものの、当時のローマでは、まだ誰も描いていなかったヴェネチア派由来の【左右短縮構図法】や、【上面に広大な空き空間を残す描法】に更なる驚きを覚えたのだ。

稀には、レオナルドやジョルジョーネに由来する【明暗法】の採用や、レオナルドの《最後の晚餐》に用いられた【数秒間の動画的物語】の再現に気付いた人物が居たのかもしれない。

まず、第一番目の理由を考えよう。

《誰がマタイかという謎解き》は、ローマ中の観衆を混乱に巻き込んだに違いない。

この絵画を初めて見た当時のローマの人々は、誰がマタイなのかよくわからず、自己の判定に確信が持てないが故に周囲に助言を求めたと考えられる。

でも、その特定は容易ではなかった。この絵画は詳細に観察しなければ、正しいストーリーが読み取れない絵画だったのだ。

とは言っても、暗い聖堂内で、しかも正面から全体に均等に目を凝らす事など出来ないし、斜め下から見上げる位置にある現地の実物を見ても、詳細と真実は決して明らかにならなかったことであろう。

ここで、【カラヴァッジョは写実描写の真実性を追求した画家】であった事実をもう一度思い起こしたい。

【デッサンを寄せ集めた嘘っぽい身体動作ではなく】、【モデルを使った実在の人物の身体動作の描写こそ真実である】と信じていた画家なのだ。

だから、カラヴァッジョの絵画を見る人には、【人物の身体表現】を詳細に見

る、あるいは検討する鑑賞法が求められるのだが、【大抵の人はその重要性を見逃してしまう。】大抵の人は、全くそのような細部表現には関心が無い。従って【細部表現に隠されている事実】に絶対気付かない。

カラヴァッジョにとって不幸な点は、【当時あまりにもその表現法が先進的であった故に、観衆の理解が追いつかなかった】ことにあった。

言い換えれば、観衆のもつ従来からの鑑賞方法では、【カラヴァッジョの到達した表現の真の意味に追いつけなかった】のだ。

そして、残念だが、【バロック以前からの絵画鑑賞法に則ったこの絵画への理解到達点から前に進むことなく400年が経過】した。その証拠に、21世紀の現在でも、誤ったマタイ解釈がそのまま訂正されることなく、堂々とそのまま放置されている。

誤った解釈とは、【マタイは髭の老人だ】とする解釈であり、【マタイは俯いた左端の若者だ】とする【二つの誤った解釈】だ。【どちらも完全に間違った解釈】なのだ。

では、カラヴァッジョの表現の何が先進的だったのだろうか。

天才画家カラヴァッジョの表現意図に対し、正確に追随するには、彼の描いた絵画に対する従来の先入観的な鑑賞スタイルを即刻改める他無いだろう。

では、【カラヴァッジョの理解に必要な鑑賞スタイル】とは何だろう。

それは、カラヴァッジョがミラノの修業時代に目にしたレオナルドの描いた《最後の晩餐》から学んだと思われる、【精神の状態を表現するには身体表現の具体性が重要】というレオナルド絵画の神髄を、カラヴァッジョが自己の作品＝聖マタイの召命でどのように実践しているのかを確かめることなのだ。

つまり【描かれている身体表現を具体的な言語メッセージに置き換える作業】が必要となる。

では、何故言語メッセージなのか。それは【カラヴァッジョの絵画表現が一瞬を捉えた静止画ではなく、時間を追って展開する動画である】からなのだ。

その展開工程は、正に【言語表現に置き換え可能な人物表現】が集積する写実主義の画像なのだ。

言い換えれば、【正確に具体的な登場人物の身体動作の展開をおさえていくことこそが、鑑賞に不可欠であった】のだ。

そうすれば、画面内の【登場人物の動作が、実は役割に従った一連の物語の

中で、動画としての重要な一断片】であることが判るのだ。

それらの断片は、一連の連続動画となつてつながり、明確なメッセージを見る側に送るのだ。つまり【明確にマタイを示す最終結果】に繋がるのだ。

悲しいことに、この【カラヴァッジョが新しく提示した動画としての絵画鑑賞スタイル】についていけない一般的鑑賞者は、カラヴァッジョの表現意図を理解できず、【瞬間的な表面理解に伴う観念的かつ、先入観を伴ったおおまかな推測鑑賞】を行い、その結果、的外れな解釈を導いてしまう結果になる。

さて、カラヴァッジョ独特の【左右短縮空間描法】とは、本来なら離れた位置に登場する人物たちを、中心部に移動させ、限られたキャンバス画面内に【圧縮描写】する方法だ。この技法はヴェネチア派の画家ヴィットーレ・カルパッチョの作品《聖ウルスラ物語》連作中の《巡礼者達の殉教と聖ウルスラの埋葬》場面に例を求めることができる。

当時の画家は、例えば、祭壇画のような、事前に制約された画面サイズに描くという宿命を背負っていた。この制約は、画家にとっては、構図設定を困難にさせる大問題であった筈。カラヴァッジョのような正確な写実を重視した画家にとっては、なおさらだった。

では、どのようにして、この問題を解決したのか。

カラヴァッジョが出した答えは、【人物の視線描写と一体化させて合理的に表現する方法での人物位置の圧縮描写】だった。

カラヴァッジョにとっては、この技法を使っている事実を判り易く観衆に伝える手段として、【登場人物の視線の設定】があったのだ。

つまり、《聖マタイの召命》では、【納税所にやってきた三人の帽子を冠った人物たちの視線方向こそが、イエスの本来の立ち位置を暗示している】のだ。

【彼らの視線は、イエスの後ろの画面外に注がれている】。

ここに気付く必要があるのだ。

つまり、この絵画場面でのイエス一行は、この収税所のドアの前に立ったばかりで、背後のドアもまだ閉められていない。(イエス一行の入った右側ドアからの水平に近い光が画面内に注がれているのがその根拠だ。)

また、【上部空間を大胆に空ける描法】は、ヴェネチア派の画家パオロ・ヴェ

ロネーゼが《カナの婚礼》や《レヴィ家の饗宴》で採用し、前例のある描法であったが、当時はまだローマ民衆に受け入れられる通常の描法ではなかったのも、この点も騒がれた理由となったのであろう。

視線描写と一体化させて表現する【人物位置の圧縮描写】を見抜き、【描かれている写實的・具体的な身体表現を明確な言語メッセージに轉換させる必要のあるカラヴァッジョ絵画への新しい鑑賞スタイルと、カラヴァッジョ以前からの即興的把握の従来の絵画鑑賞スタイルとのギャップが当時は存在していたことになる。

つまり、【絵画内容を瞬間的印象で理解しようとする鑑賞スタイル】であった17世紀初頭の人たちにとって、【動画のような連続性を内包するカラヴァッジョの社会デビュー作である聖マタイの召命】は、ストーリー内容が読めなくて、その結果、誰がマタイか解らず、多くの一般ローマ民衆にとって解析不可能な絵画だったのだ。

これが【ローマ中が大騒ぎになった最大の原因】と判定されるのだ。

つまり、卓越した技能の画家達が、ローマ教会から依頼される仕事を求めて集まっていた16世紀末のローマにおいて、カラヴァッジョが、抜きんでて上手に写實的絵画を描くことの可能な技巧派画家であったという理由ではなく、【過去の秀作を理解し、それら秀作画家の描画要素を結集して再プロデュースするという優秀な才能を持ち合わせていた点】で、カラヴァッジョは他の追従を許さなかったのだ。

つまり、当時のローマ民衆は、画家カラヴァッジョから提示された挑発的なマタイ探しのクイズ絵画に対して、苦しみながらその答えを探し、その解決過程でレオナルドが《最後の晩餐》で採用したのと同じく【時間の流れを踏む動画画表現の存在する絵画であることに目覚めさせられた】のだ。

これは当然彼への賞賛に値したのだ。

また、絵画を理解するローマ民衆からは、このマタイ探しの過程において、カラヴァッジョが、【先人画家達の秀作要素を再結集して新しい作品をプロデュ

ースする能力】を持っていることに気付いたのであろう。

従って、嫉妬の感情から、ヴェネチア派画家の真似であるという悪評が生じても、それは全く不思議ではなかったに違いないのだ。

また、忘れてはならない点は、【写実性の追求の為に、人物モデルを採用した点】だ。【用意したデッサンから絵画を構築するという従来の描画スタイル】を過去のものにするという【既存絵画文化の破壊行為】であった為、多くのローマ在住画家を怒らせたに違いない。

【この革新的技法】もまた、ローマが大騒ぎになった理由であることを忘れてはいけないのであろう。